

チャーホフ『恋について』

訳：宮下恵輔

その翌日、朝食にはとてもおいしいピロシキ、ザリガニ、そして羊のカツレツが出された。皆が食べていると、料理人のニカノールが上にやってきて、お客らが昼食に食べたいものを尋ねた。この男は平均的な身長で、顔はぷっくりとしていて、目が小さく、髭は剃っていたが、その口ひげは剃っているというよりもむしり取られたようであった。

アリヨーヒンは、美しいペラゲーヤが彼にぞっこんであるという話をした。この料理人は酔っ払いで気性が激しいため、ペラゲーヤは彼の元へ嫁ぎたくはなかったのだが、同棲することを承知していた。料理人は非常に敬虔で、彼の信仰心は妻でもないペラゲーヤと同棲することなど許さなかった。だから、彼は美しいペラゲーヤと結婚したがって、そうでないなら交際は望まず、彼女をなじり、酔っばらったときには彼女を殴りさえした。ニカノールが酔っばらっているときには、ペラゲーヤは上の階に隠れて大声で泣き、アリヨーヒンと召使は何かあったときに彼女を守れるよう、家から出なかった。

自然と恋の話になった。

「いかにして恋は生まれるのでしょうか」アリヨーヒンは言った。

「なぜペラゲーヤは、内面においても外

見においても彼女によりぴったりなほかの男を愛さずに、よりもよってニカノールを、この醜い面を愛したのでしょうか。（ここで、私たちはみな彼を「醜い顔」と呼んでいる）恋においては個人の幸せが問題となるのですからね。……すべてが不明確であり、すべてにおいて、自由に議論ができます。これまで、恋について語られていたのは、たった一つの議論の余地のない真実です。それはまさに「これ偉大なる神秘なり」であるということだけで、恋について書かれた、また話されたほかのすべての事柄は決定打ではなく、単に未解決のままになっていると問題定義されているに過ぎないのです。ある出来事にとって役に立つように思われる説明は、ほかの十の出来事に関しては大して役に立たない、一番良いのは、私が思うに……、それぞれの出来事を一般化しようとせずに別個に説明することです。医者が言うように、それぞれのケースを個別化することが必要なのですよ。」

「全くその通りだ」ブルキンが同意した。

「私たちロシアの紳士は、未解決のこの問題に対して心惹かれるのです。普通、恋を飾るのはバラやサヨナキドリですが、我々ロシア人は恋を宿命的な問いで飾り、そしてそこから我々は最もつまらないものを選ぶのです。

「私がモスクワでまだ学生をしていたころ、同棲していた彼女がいたのですが、そのかわいい女性は私に抱擁されているときにいつも、私が彼女にひと月にいくら渡すか、今、牛肉は1ポンドいくらか

といったことを考えていたのです。

我々も、恋をしているときは、絶えず問いかけてしまうものです。本気かそうでないか、賢いのか愚かなのか、この恋はいったい何になるのか、といった具合に。絶え間のない問いがいいことなのかどうか私にはわかりませんが、これが心をかき乱し、不満をもたらし、いらだたせることは知っています。」

ブルキンは何か言いたげなようだった。独り身の者は、いつも心の底に語って聞かせたい何かがあるものだ。町では独り者がただ話すためだけにわざとバーニャやレストランに行くのだが、時々、浴場の従業員やウェイターにとっても面白い話をし、村では自分の客の前で、自身の心情をぶちまけるのだ。今や窓の外には灰色の空と雨で湿った木が見え、このような天気ではどうしようもなく、話すことと聞くこと以外にできることはなにもなかった。

「僕はソフィノに住んでいて、もうずいぶん長いこと農業に携わっておりますが」アリヨーヒンが話し始めた。

「大学を卒業してからずっと農業をしているんですがね。育ちからいえば、僕はあまり土にまみれたこともなく、性質としてはこもりがちの人間なのですが、この領地に僕が来た時、大きな負債がありまして、というのも僕の父がいくらか借金をしていたからなのです。それというのも、僕の教育にたくさんお金を使ったからなんですね。ここで僕は、負債を返し終わるまで、ここを出ていかず、働こうと決めたのです。

そうと決め、働き始めたわけですが、白状しますと、嫌だなと思う気持ちになかったわけではありません。ここの土地は実入りが悪く、農業で損が出ないためにも、農奴や小作農を使う必要がありました。農奴でも小作農でも同じなのですがね。あるいは、農業を農奴式にやらなければならなかったのです。すなわち、自分自身で野良仕事をして、そして一家総出で農作業をしなければならなかったのです。折衷案はありません。でも、この時僕はこのような細かいことは考えませんでした。僕は土地の一片たりとも遊ばせておくことをせず、農民の男も女も全員を隣の村から駆り出しました。それはもう、働きに働きました。僕自身も地面を耕し、種をまき、草を刈りましたが、こうしているうちに退屈になり、嫌な気分を顔にしかめたのでした。それはまるで空腹のせいで菜園にあるきゅうりを食べてしまった田舎の猫の渋面のようなものでした。僕の体は痛み、歩きながら寝てしまいました。はじめ、この労働生活をすべての文化的な習慣と両立させることは簡単だと考えていました。このためにすべきなのは生活において一定の表面的な秩序に従うことだけだと考えていました。僕はこの二階の上等の部屋に住みつき、朝食と昼食の後にはリキュール入りのコーヒーが出され、寝転がりながら深夜には『ヨーロッパ報知』を読むという生活を送っていました。しかし、いつだったかイヴァン神父がやってきて、僕のリキュールを一気に飲み干したのです。『ヨーロッパ報知』は司祭の娘たちの手に渡りましたが、それはなぜかという、

夏、特に草刈り期、僕はベッドにたどり着くことがかなわず、物置にあるそりやどこかの森の小屋で寝ていたからです。このような状況で本など読めるでしょうか？僕はだんだん下の階に行くようになり、召使部屋の台所で昼食を取るようになりました。昔の贅沢な暮らしのうち、今、僕に残っているのは、父の時代から仕えており、暇を出すのは忍びないと思う召使たちだけです。

最初の数年間、僕は名誉治安判事に選ばれました。時たま、町へ行って代表者大会や地方裁判所の会議に参加しなければならなかったのですが、僕にはこれが楽しみでした。村に二、三カ月も住んでいると、特に冬場、しまいには黒いフロックコートが恋しくなるんですよ。地方裁判所では、フロックコートや制服、そして燕尾服を着た人がいましたが、それはつまり、そこにいる全員が法律家、そして教養のある人々であるということでした。話し相手には事欠くことはありませんでした。そりで眠り、そして召使部屋の台所でご飯を食べた後に、清潔な下着を身に着け、軽い編み上げ靴を履いて、胸にチェーンを着けて、ソファに座るのはなんと贅沢なことでしょう！

町では僕は歓迎され、進んで多くの人と知り合いになりました。そしてそれらの人たちの中で最も付き合いの深く、そして、正直に申し上げると、僕にとって最も快い出会いは地方裁判所副議長のルガノービッチとのそれでした。彼のことをあなた方お二人はご存じかと思いません。とてもいい人です。それは放火犯の有名な裁判の後のことでした。審理は二

日続き、僕たちは疲れていました。ルガノービッチは僕を見てこう言いました。「どうです？昼食はうちでいかがですか」

全く突然のことでした。その当時、ルガノービッチについて僕の知っていることはわずかで、仕事上のことしか知りませんでしたし、一度も彼の家に行ったことはありませんでした。僕は急いで部屋に戻り、着替えて、昼食に向かいました。そして、ここで僕に、ルガノービッチの妻であるアンナ・アレクセーエヴナと知り合う機会が訪れたのです。当時、彼女はまだ非常に若く、二十二歳にも満たないほどでした。そんな彼女は半年前に一人目の子どもを産んでいました。もう過去のことですから、本当のところ、彼女の何がそこまで優れていて、なぜ僕は彼女をいたく気に入ったのか、今となってはよくわからないのです。しかし、昼食を取っているとき、僕にとってはすべてが反駁しがたく明らかでした。この若く、美しく、親切で、知性があり、魅力的な女性に出会ってしまったのです。これまで出会ったことのないような女性でした。そして僕はすぐ、彼女の中に近いもの、すでに知り合いであるかのようなものを感じ、この顔を、愛らしく、賢さのあるこの目を僕は子ども時代に、母のタンスにしまっているアルバムの中で見たことがあるような気がしました。

放火犯の事件では四人のユダヤ人が起訴されていて、この四人は共犯とみなされたのですが、僕に言わせれば、これはまったく根拠のないものでした。昼食の間中、僕はとても不安で、気が重く、何

を話したのか覚えていませんでした。アンナ・アレクセーエヴナはただいぶかしげに首を振り、夫に話しかけていました。

「ドミトリー、これはどういうことなの？」

ルガノービッチは善き人で、最も素朴な心の持ち主の一人でした。というのも彼は、人が裁判にかけられるというのは、その人に非があることを意味しており、判決の正当性に疑問を投げかけることは、法秩序や文書の上ではできても、昼食中や日常の会話のなかではできないと強く信じていました。

「僕らは放火なんてしていないよね。」ルガノービッチは優しく言いました。

「そして、僕らが裁判にかけられることもないし、刑務所に入ることもないよ」

そして、夫と妻の両方が、僕がもっと飲み食いするよう気を揉んでいました。彼らが一緒にコーヒーを淹れる、一言二言ですぐに理解しあえるといった些細なことから、私はこの夫婦が平和に、順調に暮らしており、そして客を迎えることに喜びを感じていると結論付けました。昼食のあと、彼らはピアノを連弾し、そのあとあたりが暗くなると、私は家路につきました。それは春の始めのことでした。私はソフィノから出ることなくその夏を過ごし、町のことを考えることすらできませんでしたが、均整の取れたブロンドの女性の思い出は夏中、私の心に留まっていました。つまり、私は彼女のことを考えていたわけではありませんが、でも確かに、彼女のかすかな影は私の心にちらついていたのです。

秋も深まったころ、町で慈善興業がありました。私が知事のボックス席に入ると（幕間にここに招待されたのです）、知事夫人の隣にアンナ・アレクセーエヴナがいるではありませんか。私はまたしても、彼女の美しさと、かわいらしく、愛情のこもった瞳に衝撃を受け、またしても彼女に親しみを感じました。私たちは並んで座り、そしてロビーを歩きました。

「あなたは痩せましたね」彼女は言いました。「ご病気でいらしたのですか？」

「はい。肩が冷えましてね。加えて雨の日にはどうも寝つきが悪いのです」

「お元気がなさそうですわ。春ごろに私たちの家に昼食へいらしたときは、もう少し若々しくて、元気でいらしたのに。あの時のあなたは気持ちが高揚していて、たくさんお話になって、とても面白かったですわ。白状いたしますと、私はちょっぴりあなたに惹かれてしまいましたのよ。夏の間、なぜかあなたのことがよく頭に浮かんでいました。そして今日、私が劇場に向かおうとしているとき、あなたに会えるような気がしていましたの。」

そう言って彼女は笑いました。

「でも、今日のあなたはお元気がないようですわ」彼女は繰り返した。

「そのせいで老け込んで見えますよ」

その翌日、私はルガノービッチの家で朝食を取りました。そのあと、ルガノービッチ夫妻は冬支度のためにダーチャへ向かい、私も彼らに付いて行きました。夫妻と町に戻ってくると、真夜中に、静かな、そして家庭的な雰囲気漂う彼ら

の家でお茶を飲んでいまして、そのとき暖炉は燃え、若き母親は子どもが寝ているか確かめに部屋を何度も出入りました。これを境に、町に来るたびに私はルガノービッチ家に行くようになりまし
た。彼らも私に慣れ、私も彼らに慣れました。私は常に、取次なしで、まるで家族の一員であるかのように彼らの家に入りました。

「誰ですか？」遠くの部屋から、ゆったりとした声が聞こえます。その声は、私には大層美しく思われました。

「パーヴェル・コンスタンチヌィチ様です」召使やら乳母やらが答えるのです。アンナ・アレクセーエヴナは不安でいっばいな表情をして部屋から私のもとに来て、毎回尋ねるのです。

「どうしてこんなに長い間いらっしゃらなかったの？何かありまして？」

彼女のまなざし、私に差し出された優雅で上品な手、部屋着、髪型、声、歩みは毎回、何か新しく、私の人生において特別で、そして重要であるという印象をもたらしたのです。私たちは長い間話をしたと思えば、それぞれ自分のことを考えて長い間黙り、かと思えば彼女が私にピアノを弾いてくれたりしました。もし家に誰もいなかったら、私は夫妻の家にとどまって待ち、乳母とおしゃべりをしたり、子どもと遊んだり、もしくは書斎のトルコ風ソファに寝そべって新聞を読み、アンナ・アレクセーエヴナが帰ってきたら、私は彼女を玄関で出迎え、彼女が買ってきたものすべてを彼女の手から取り、なぜかいつも、それを私は愛いっばいに、歓喜に満ち溢れて運んだので

す。まるで少年のように。

このようなことわざがあります。「女には苦勞がなかったので、子豚を買った」ルガノービッチ家には苦勞がありませんでした。だから私と親交を始めたのです。私が長い間町に出なかったとすれば、それは彼らにとって、私が病気にかかったか、または私の身に何か起きたことを示しており、彼らは大いに心配しました。夫妻は、教養があり、言語に堪能な私が学問や文学にいそしむのではなく、村に住み、リスがせわしなく滑車の中で駆け巡っているようにいつも忙しくしており、たくさん働いているにも関わらず、いつも無一文であるのではないかと心配していました。彼らには、私が苦しんでいるように思われていたようで、私が話し、笑い、食べていると、それはただ私自身の苦しみを隠そうとすることと理解され、楽しいひと時、私の気分が良いときでさえ、彼らの探るような目が私に注がれているのを感じました。私が本当につらいとき、私が債権者に迫られたり、急ぎで支払わなければならない時にお金がないときに、夫妻はとりわけ感情的になりました。夫と妻の両者は、窓際でこそこそ話したかと思えば、ルガノービッチが私のもとに来て、真剣な顔をして言うのです。

「もしあなたがね、パーヴェル・コンスタンチヌィチ、今の今、お金がご入用なら、どうかためらわず我々からお金を借りてくださるよう、私と妻はあなたにお願いをしますよ」

興奮のあまり、彼の耳は赤くなっていました。また、こんなこともよくあった

のですけれども、窓際でこそこそしたかと思えば、耳を赤くして私のほうにやってきてこう言うのです。

「私と妻は、あなたがこの贈り物を受け取ってくださることを切に願っています」

そして渡されたのはカフスポタンにシガレットケース、はたまたランプでして、お返しに私は村から、絞めた鶏にバター、そして花を彼らに贈りました。ついでに申しますと、彼らはどちらも裕福な人間でした。はじめ、私はよく借金をしていて、誰からも見境なく、借りられるところから借りたものでした。しかし、どんなに強制されても、ルガノービッチから借りることはできなかつたでしょうよ。こんな話しどうでもいいですな！

私は不幸でした。家でも、畑でも、納屋でも、私は彼女のことを考えました。若く、美しく、聡明な女性が、面白みのない、ほとんど老人のような人間に嫁ぎ（彼女の夫は四十歳を超えているのです）、彼との子どもがいる。なぜなのかを理解しようとしてしました。そして、面白みのない、お人よしで、間抜けなこの夫は、退屈な良心をもって物事を判断し、舞踏会やパーティーで堅物たちと付き合い、活気がなく、必要とされておらず、従順で無感情な表情をして、まるで売られに来たようでしたが、しかし、自らが幸せになり、彼女との子どもを設ける権利があると信じているこの人間の秘密を私は理解しようとしてしました。私は、彼女が私ではなくルガノービッチと出会った理由を、我々の人生において、このよう

な悲劇的な誤りが起きることがなぜ必要だったのかを理解しようともがきました。

町に行くたび、僕はアンナ・アレクセーエヴナの瞳から、彼女が僕を待っていたことを感じ取りました。そして彼女の方も朝からなんだか特別な感じがして、僕が来る予感がしたと言ったものです。僕たちは長い間、話したり黙ったりしていましたが、お互いの恋心について打ち明けることはせず、その気持ちを、たどたどしくも、燃えるように隠すのでした。僕たち自身がその秘密に気づいてしまうことを、僕たちは恐れました。僕は彼女を静かに、そして深く愛していましたが、僕は考え込み、そして自分に問いました。もし僕たちが、自分たちの恋と戦うだけの力がないとすれば、この恋はどうなるのか。ルガノービッチと彼らの子どもの暮らしの、そしてこれほどまでに僕を愛し、これほどまでに僕を信じてくれたこの家のすべての幸福な流れを、僕のこの静かで悲しき恋が突然、乱暴に断ち切ってしまうなんてことは現実味がないように思われたのです。

これは正しいことなのか？彼女が僕について来るとして、どこへ行くというのか？彼女をどこに連れ去ることができるというのか？仮に、僕の人生が美しく、そして面白いものであったなら、あるいは僕が、例えば、祖国解放のために戦っているとか、あるいは有名な学者、俳優、はたまた芸術家であったならば、別の話だったでしょう。しかし、いまの僕では、あるありふれた単調な環境から、別のありきたりな、あるいはそれ以上に

単調なところへと彼女を連れ出すはめになったはずです。僕たちの幸せはどれほど長く続くというのでしょうか？僕が病に臥せる、あるいはこの世を去ってしまったら、あるいは単にお互いに愛情が冷めてしまったとしたら、彼女はいったいどうなるのでしょうか？

そして、明らかに彼女も同じようなことを考え込んでいました。夫のことを、子どもを、夫をまるで自分の息子のようにかわいがる母のことを、考えていました。もし彼女が自らの気持ちに身を任せていたならば、嘘をつくか、あるいは本心を話したでしょうか、彼女の状況ではどちらも同じくらい恐ろしく、そしてきまりが悪いものだったでしょう。そして、彼女を自問が苦しめました。この恋は僕に幸福をもたらすのか？ただでさえ重苦しく、そしてまったく不幸せな僕の人生をさらに複雑なものにするのか？アンナ・アレクセイエヴナは、自分は今僕にとって若くなく、新しい人生を始めるほど精力的でエネルギッシュなわけでもないと思っていました。立派な主婦になり、そして手助けのできる聡明で立派な女性と僕が結婚する必要があると、彼女はいつも夫と話し、そしてすぐ、町のどこにもそんな女性はいないのだと付け加えるのでした。

そうこうするうちに月日が経ちました。アンナ・アレクセイエヴナにはもう二人の子どもがいました。僕がルガノービッチの家に行くと、召使が親切そうに笑みを浮かべ、パーヴェル・コンスタンチヌィチおじさんが来たとき子どもたちが叫び、僕の首にぶら下がりました。皆が

喜んでいました。僕の心のうちで何が起きているかを彼らは知らず、僕も彼らと同じように喜んでいて思われていました。誰もが僕を高貴な存在とみなしていました。大人も子どもも、高貴な存在が部屋を歩き回っていると感じており、この感情が彼らの私への接し方に特別な魅力をもたらしていました。まるでこの僕がいることによって彼らの暮らしがより高潔で、より美しくなっていると感じているようなのでした。僕とアンナ・アレクセイエヴナと一緒に劇場へ行くときは、毎回徒歩でした。ソファに並んで座ると、お互いの肩が触れ合いました。僕は黙って彼女の手からオペラグラスを取りましたが、この時僕は彼女を身近に感じ、彼女は僕のもので、お互い離れられるはずがないと感じましたが、なにか変な誤解から、劇場を出ると、僕たちはいつも別れの挨拶をし、まるでお互い関係ない人かのようにそれぞれ帰路に付きましました。町ではすでに私たちに関する不愉快な噂が流れていましたが、そのどれも真実ではありませんでした。

最後の数年間、アンナ・アレクセイエヴナは母や妹のもとへ頻繁に通うようになりました。彼女の気分はすっかり悪くなり、満たされず、人生をすっかり無駄にしてしまったという感覚に陥りました。そんなとき、アンナ・アレクセイエヴナは夫も見たくなければ子どもも見たくなかったのでした。彼女はその時すでに、神経症の治療を受けていました。

僕たちは黙り通していましたが、ほかの人がいるときには、彼女は僕に対して何か奇妙ないら立ちを覚えているようで

した。僕が何を話そうとも、彼女は私に賛成しませんでしたし、私が誰かと口論していると、彼女は僕ではない者の肩を持つのでした。僕が何かを落とすと、彼女は冷たくこう言い放つのでした。

「おめでとうございます」

彼女と劇場へ向かっている途中、僕がオペラグラスを持ってくるのを忘れたのに気づくと、彼女はこう言うのでした。

「わかっていましたよ、あなたが忘れ物をすることくらい」

幸か不幸か、人生には、いつまでも終わらないことなどありません。別れの時が来たのです。というのも、ルガノービッチが西部の県の議長に任命されたからです。家具や馬、別荘を売却する必要がありました。別荘に行って帰ってきて、庭や緑の屋根をこの目に焼き付けようとしてあたりを見回したときは、皆が悲しげでした。そして僕は、別荘とだけの別れが来たというわけではないことを理解しました。八月の終わりに、医者から転地療養するように言われたクリミアにアンナ・アレクセーエヴナを送り出し、しばらくしてからルガノービッチは子どもたちと一緒に件の西部の県に行くことが決まりました。

僕たちはアンナ・アレクセーエヴナを大勢で見送りました。彼女が夫や子どもとの別れの挨拶を終え、三回目の鐘が鳴るまであと一瞬というとき、僕は彼女めがけてコンパートメントに駆け込み、彼女が忘れそうになった籠のひとつをアンナ・アレクセーエヴナの棚に置きました。そして、別れを言う必要がありました。このコンパートメントで僕たちの視

線がぶつかり合うと、私たちを縛っていた力が消えていきました。僕は彼女を抱きしめ、彼女は僕の胸に顔を押し当て、涙は目から零れ落ちました。涙に濡れた彼女の顔、肩、手にキスをすると一ああ、僕たちはなんて不幸だったことでしょう！一僕は彼女に自らの気持ちを告白し、僕たちの恋を阻むものすべてがどれだけ不必要で、些末で、そして見掛け倒しだったのかを、焼けるような心の痛みとともに僕は理解しました。誰かに恋をするとき、その恋に関する自らの判断は、よく言われるような幸福か不幸か、あるいは罪か徳かということよりも高尚で重要なものに端を発すべきなのです。そうでないなら何も考えないほうがいいのです。-

僕は最後にキスをして、手を握り、別れました。それは永遠の別れでした。列車はすでに出発しました。僕は隣のコンパートメントに座りました（そこは空っぽでした）。最初の駅に到着するまでそこにとどまって、泣いていました。駅に着くと、僕はソフィノに向かって歩き出しました……。」

アリョーヒンが話している間に雨は止み、太陽が顔を出した。ブールキンとイヴァン・イヴァヌィチはバルコニーに出た。そこからは庭と、太陽の光を受けて鏡のように輝いている静かな川面という美しい光景が広がっていた。彼らは美しい景色を眺めながらも心を痛めていた。こんなにも率直に二人に話をしてくれた善良で聡明な男は、実際には、彼の人生をより豊かにしたであろう学問に取り組

むことはせず、リスが回し車の中で駆け回るようにこの広大な領地であくせく働いてきたのかと惜しんだのである。

そして彼らは、アリョーヒンがコンパートメントで別れを告げ、顔と肩にキスをしたあの若き女性がどれだけ悲しい顔をしたことだろうかと考えた。ブルキンとイヴァン・イヴァヌィチはどちらも彼女と町で見かけたことがあり、ブルキンに至っては彼女と知り合いで、彼女をかねがね美しいと思っていたのである。